自立へのパスポート '99 00 〈21〉

第2部「3K」を生かせ―観光

自然、文化、施設の活用

資源で地域活性目指す

座間味村と読谷村で、「経験（体験）型」観光を生かした事業が、動きだそうとしている。島の自然や文化を活用したい座間味村と既存施設を再利用する読谷村。両村ともに観光を活用した「地域活性化」を目指している。

■ダイビングの島

那覇から西へ四十キロ、高速船で一時間弱かかる慶良間列島。二月中旬、座間味島、阿嘉島に向かう八十人乗りの高速船は、悪天候にもかかわらず、ホエールウオッチングの観光客らでほぼ満杯となっていた。

座間味村は離島の中では珍しく人口が増加し続けている地域だ。八五年に約八百人だった人口が、今年いっぱいには約千二百人、十年後の二〇一〇年は、八五年の二倍に相当する約千六百人が見込まれている。

人口と同じように観光客数もここ五年間増加しており、九八年は九万四千人に上った。単純計算で村人口の九十倍に当たる観光客が同村を訪れたことになる。村内のホテル・旅館は約七十軒、ダイビングショップは約四十軒にも上る。ダイビング客が島に住み着いたケースや、シーズン中にダイビングショップで働くようになっていることが人口増加の要因とも言える。年齢別人口構成でも二、三十代層が厚みを増している。

■エコアイランド

県内におけるホエールウオッチングは、十年ほど前から座間味村や渡嘉敷村で、冬場の観光需要の掘り起こしを狙いに始まった。一月から三月までの期間限定で、参加者数は「天候に左右される」ものの、増加傾向にあり、一九九八年度は両村合わせて五千人以上が参加したと見込まれている。

しかし月別観光客数を見ると、ダイビング需要に支えられたピーク時の夏場に比べて、十一月から一月の冬場は三分の一まで落ち込む。ホエールウオッチングだけでは冬場の需要喚起はまだ厳しい状況だ。座間味村では国のウエルネス計画やエコツアーのモニターツアーが実施され、ホエールウオッチング以外の新しい観光の形態を模索し始めている。

仲村三雄村長は、こうした新しい観光の動きも含めて、地域特性を生かした環境に優しい村づくりを目指す「エコロジーアイランド」構想を練っている。観光産業と農林水産業との連携も推進したい考えで、ひいては産業振興に結び付けていきたいとしている。来年一月に具体的内容を明らかにする予定だ。

■「琉球の風」

読谷村の海辺に近いサトウキビ畑に囲まれた、九二年放映のNHK大河ドラマ「琉球の風」撮影のため建設された赤がわらの並んだテーマパーク。四万平方メートルの敷地に、約二十億円かけて琉球王府時代の主な建築物を再現している。しかし入場者数の減少で、運営会社の経営が悪化。九九年三月、同社から村へ無償譲渡された。

同年五月には、「琉球の風」再活性化を目指して、村が委託した村商工会の会員らによって施設を管理運営する新会社が設立。現在、四月下旬のリニューアルオープンに向けて、内部の整備を進めている。陶器、琉球ガラス、織物のアトリエや黒糖工場などを施設内に設け、入場者に物作りを体験させる「芸術村（体験）ゾーン」など四ゾーンを形成していく。

だが、新会社・読谷ククルリゾート沖縄の国吉真哲社長はこの施設を単なる観光施設とはとらえていない。村の施設であるため、村民には出入りを自由にし、再オープン後は無料パスを作って有料の一般客との差別化を図っていく。実際、施設内で老人会や婦人会の会合や新年会を開催したほか、結婚式を挙げた力ップルもいたという。

「あくまでも既存のロケーションを崩さないで、見せる世界じゃなくて体験することもできる本物志向の長期滞在型施設を目指している。地元客と観光客が一体となって楽しめるゾーンにしたい」と意欲を見せている。

（「自立へのパスポート」取材班＝政経部・玉寄興也）

この企画は毎週水―金曜日に掲載します。

座間味村でのモニターツアーを前に2月下旬、専門家らが事前調査した＝阿嘉島

ID.44

座間味島近海をのんびりと遊泳するクジラ＝2月27日、座間味島沖

座間味 ホエールウオッチング・フォーラム

未来につなげよう 海・島・クジラ

「未来につなげよう海・島・クジラ」をテーマに、自然保護の重要性や島の財産として自然環境を生かした観光（エコツーリズム）を考える「ホエールウオッチング・フォーラム」（主催・ホエールウオッチングフェスタ2000開催実行委員会、共催・座間味村、琉球新報社）が二月二十六日夜、座間味村離島振興総合センターで開催された。

夏はスキューバダイビング、冬はホエールウオッチングの観光産業が定着しつつある同島で、これからの自然保護と、豊かな自然を利用した観光のあり方について、海や自然を愛する人たちが、それぞれの立場で意見を出し合った。

自然に対する謙虚さの必要性や、ガイドの人材育成、地元住民との出会いを大事にすることなど、クジラを取り巻く座間味島の将来像について考えた。

パネリスト

ジャック・T・モイヤー氏（海洋生物学者・農学博士）
村田　泰裕氏（シーカヤックインストラクター）
宇津　孝氏（自然写真家）
開　梨香氏（オフィスHIRAKI代表）
ロバート・S・ルーク氏（在沖縄米国総領事）
谷口　洋基氏（阿嘉島臨海研究所研究員・工学修士）
【総合司会】
玉城　朋彦氏（メディア・エクスプレス代表）

公共工事で自然保護を　ルーク氏

地元の良さ再認識して　開　氏

生物のストレス避けて　モイヤー氏

玉城氏　座間味の問題点や課題をどうみるか。

谷口氏　夏場はダイビング客が増えるが、ダイビングボートのアンカーがサンゴを傷つけることがある。自分の船だけと思わずに、小さなことから気を付けるべきではないか。

ルーク氏　国によってはアンカー禁止のところもある。国・県の行政が気を付けないといけないのは、公共工事。地元経済を回復させる考えが多いが、人間が作れない自然を守るために、自然を使う方向を模索できないだろうか。

モイヤー氏　ダイバーのフィン（足ひれ）が、サンゴを壊すことがある。最近のダイバーは、ファッションにこだわるところがあるが、グローブ（手袋）はやめた方がいい。グローブをはめていると、サンゴなどに触れてしまう。生物のストレスにならないようにダイビングすることが大事。

開氏　意外と地元の人は、この素晴らしい自然や環境が当たり前過ぎて、その価値を知らないのでは。気づくことで興味がわいてきて、愛情が芽生え、自然を次に残すことができる。もっと地元の人が参画しながら、自然の素晴らしさを再認識し、愛情を持つことが大事。

村田氏　アメリカやカナダを旅行していて感じたことだが、必要以上に人間を自然に踏みこませないというルールがあり、何事も「過ぎない」という自然に対する謙虚さがある。山であれば、歩けば何かを踏みつぶすことになる。そのような自然への謙虚さが必要。

谷口氏　「過ぎない」とは、教育。座間味の子供いう話だが、自然は自分で回復できる力があるが、その限度を超えて人間が入り込むと、衰退していく。さんご礁はいったん死んでしまうと、回復するまでに二十年、三十年とかかる。

玉城氏　モイヤーさん、先ほどストレスという話があったが。

モイヤー氏　ストレス関係の研究はこれから。その研究が分かる前に大事なことが、次世代につながるのでは。

宇津氏　ダイバーのフィンがサンゴを壊すことより、生活排水の方がもしかしたら深刻かもしれない。目に見えない部分の意識を持つことも大事だ。

玉城氏　最後に何か一言。

ルーク氏　捕鯨が禁止され、座間味のクジラが増加した。白化現象は、地球温暖化につながる。地域の経済と、世界はつながっていると感じた。

宇津氏　行政は「箱」を造ることは得意だが、人材を育てるのが苦手。座間味ならではのガイドを養成してほしい。

開氏　観光客は、その地域らしさを体験できた時、ほとんどの人がまた行きたいと思う。昔話や知識が豊富な座間味の元気なお年寄りらが、生きがいを持てるような出会いが増えると、リピーターも増えるだろう。

谷口氏　オーストラリアのさんご礁、グレートバリアリーフでは、だれも入ってはいけない場所を確保し、サンゴを保護している。座間味流のサンゴの保全方法を作り、それが世界の手本になるように頑張ってほしい。

開　梨香氏　ロバート・ルーク氏　谷口洋基氏
玉城朋彦氏　宇津　孝氏　村田泰裕氏

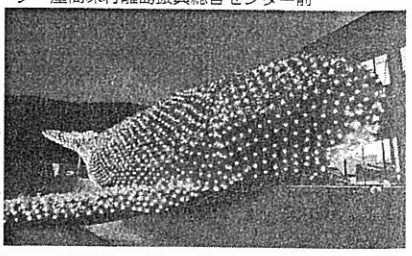
海にごみ捨てる漁師も　村　田氏

生活排水がサンゴ壊す　宇　津氏

座間味流の保全策必要　谷　口氏

パネリストを囲み、自然保護と観光客のどについて、活発な議論が繰り広げられ間味村離島振興総合センター

等身大のクジラをかたどった花だんのライトアップ＝座間味村離島振興総合センター前



ンゴやクマノミなどがずっといると思っているだろうが、そうではない。学校の授業で座間味の自然や将来について学び、考える授業を持つべきだ。

村田氏　私がシーカヤックで旅をしていて感じたことだが、意外と漁師が簡単に海にごみを捨てている人が多かった。ローカルルールをきっちりとつくることが、次世代につながるのでは。